

ごろつきの話

折口信夫

青空文庫

一 ごろつきの意味

無頼漢^{ゴロツキ}などいへば、社会の瘤のやうなものとしか考へて居られぬ。だが、嘗て、日本では此無頼漢が、社会の大なる要素をなした時代がある。のみならず、芸術の上の運動には、殊に大きな力を致したと見られるのである。

ごろつき鳴るやうに威嚇して歩くからだともいふが、事實はさうでなく、石塊がごろ／＼してゐるやうな生活をしてゐる者、といふ意味だと思ふ。徳川時代には、無宿者・無職者・無職渡世などいふ言葉で表されてゐるが、最早其頃になつては、大体表面から

消えてしまふたと言へるのである。

ごろつきが発生したには長い歴史があるが、其は略する。此が追々に目立つて来たのは、まづ、鎌倉の中期と思ふ。そして、其末頃になると、此やり方をまねる者も現れて来た。かくて、室町を経て、戦国時代が彼等の最跳梁した時代で、次で織田・豊臣の時代になるのだが、其中には随分破格の出世をしたものもあつた。今日の大名華族の中には、其身元を洗うて見ると、此頃のごろつきから出世してゐるものが尠くない。彼等には、さうした機会が幾らもあつたのだ。此機会をとり逃し、それより遅れたものは、遂に、徳川三百年間を失意に送らねばならなかつたのであつた。

二 巡遊団体の混同

先、彼等は、どんな動き方をして現れて来たかを述べよう。

日本には、古く「うかれ人」の団体があつた事を、私は他の機会に述べてゐる。異郷の信仰と、異風の芸術（歌舞と偶人劇）とを持つて、各地を浮浪した団体で、後には、海路・陸路の喉頸の地に定住する様にもなり、女人は、其等の芸能と売色とを表商売とするやうになつたのであつたが、いつか彼等の間にほかひぐとの混同を見るやうになつた。大和朝廷の統一事業と共に、失職した村の神人たち、或は、租税を恐れて、自ら亡命したものなどがあつて、山林に逃げ込み、地方を巡遊したりしたものがあつたから

だ。

一方、うかれ人の方も、漸次生活が変化して行つたが、何と云つても、彼等は奴隷としての待遇しか受けることが出来なかつた。

かうして、此二者は早くから歩み寄つてゐたのであつたが、更に、平安朝の末に至ると、愈其等のものが混同し、同化するやうになつた。行基門徒の乞食・陰陽師・唱門師・修験者など、さうした巡遊者が続出したからであるが、尚、その一つの大きな原因は、貴族の勢力が失墜すると同時に、社寺の勢力も亦衰頽を來した為、其等の社寺に隷屬してゐた奴隷たちが、自由解放を行つた事である。其等の社寺には、ジンニン神人・童子など、稱し、社の祭事・寺の法会などに各種の演芸を行つたものが居つたが、彼等は生活の不

安を感じ出した事によつて、其等の社寺を離れ、各自属した処の社寺の信仰と、社寺在来の芸能とを持つて、果なき流浪の旅に上る様なことになつた。彼等は、山伏し・唱門師の態をとつて巡遊したのであつた。在来の浮浪団体に混同したのは、当然のことである。

更に、此頃になつて目立つて来た、もう一つの浮浪者があつた。諸方の豪族の家々の子弟のうち、総領の土地を貰ふことの出来なかつたもの、乃至は、戦争に負けて土地を奪はれたものなどが、諸国に新しい土地を求めようとして、彷徨した。此が又、前の浮浪団体に混同した。道中の便宜を得る為に、彼等の群に投じたいふやうなことがあつたのだ。後世の「武士」は、実は宛て字で

ある。「ぶし」の語原はこれらの野ぶし・山ぶしにあるらしい。又、前の浮浪者とても、元来が、喰はんが為の毛坊主商売なのであつて見れば、利を見て、商売替へをするには、何の躊躇もなかった。

三 野伏し・山伏し氣質

彼等は、先、人里離れた山奥に根拠を据ゑ、常には、海道を上り下りして、他の豪族たちの家々にとり入り、其臣下となり、土地を貰ひなどしたのであつたが、又中には、其等の豪族にとつて替つたものなどもあつた。

彼等が、豪族にとり入った手段には種々あるが、一体に、彼等が道中したのは、武力で歩いたのではなく、宗教を持つて歩いた。行法を以てした山伏しである。義経が奥州へ落ちる時、山伏し姿で道中したのは、後の人から見れば、つくり山伏しであるが、當時としては、道中をするには其が普通だったとも見られる。

彼等は団体をなして歩いた。山伏しについては、曾て「翁の発生」の中でも触れて置いたが、彼等が団体的に行動するなど、いふことは、平安朝の頃まではなかつたのであつたが、時代の刺戟は、彼等を団体的に行動せしめるやうになつたのである。虚無僧・普化僧は、其一分派である。即、禅宗に結びついて出来たものである。彼等は単独の形をとつた。これの著しく目立つて来たのは、

略、南北朝頃と思はれる。

彼等の団体には取締り監督があつた。先達が、其である。彼等は行く先々の家々村々を祈つて歩いた。彼等は、其で易々と糊口の道が得られたのであつた。若し、其等の家々村々でよくしないと、彼等は祈りの代りに呪ひをかけた。山伏しが逆法螺を吹くといふ事は、後々までも恐しい事にされてゐた。山伏しの悪業は近世ほどひどくなつたのであつたが、昔から、依頼と恐怖との二方面から見られてゐた。だから、彼等は易々と道中する事が出来たのであつた。

四 治外法権下の悪業

昔から、宗教の方面には、政治の手が届かなかつた。其には理由があるので、言はず語らずの掟があつて、彼等は全く政治家の権力以外を行つた。江戸時代になつてからも、寺社奉行などはあつたが、山伏しの取締りには、随分幕府も困つた様である。駈落者・無宿者・亡命の徒などが彼等の中へ飛び込めば、政治家も、其をどうする事も出来なかつた。こんな事は以前からもあつた。だから、武力を失うたものが、逃避の手段として、山伏しになつたなど、いふのが少くない。前に述べた様な理由と、二重の理由によつて、易々と生活して行けたからである。

更に、彼等は後々までも、殊に徳川初期に於て諸大名たちを弱ら

せた事實に就ても、考へて置かねばならぬ。彼等が大名たちを弱
らせたには、弱らせるだけの理由があつたと見られる。諸大名が
出世をしたには、皆彼等の手を借りてゐる。彼等は、戦国の当時
には、殆ど庸兵として、諸国の豪族に腕貸しをしてゐる。後に大
名になつたもので、彼等の助力を受けてゐないものは殆ど一人も
ない、と云うてよからう。又、彼等の中から出世したものもある。
上州徳川の所領を失うたといふ徳阿弥父子が、三河の山間松平に
入り婿となる迄の間は、遊行派の念仏聖として、諸方を流離した
のであつた。江戸時代になつて、虚無僧は幕府から朱印を貰うた
といふが、其には、訣があつたのだと考へられる。

かゝる事情があつた為に、彼等は後々までも我儘をし、大名たち

も、其を抑へる事が困難だつたのである。それには、彼等が法力を持つてゐたことも關係してゐたと思はれる。九州彦山の山伏しが虐殺されたことがある。如上の理由があつて、あまりに彼等の我儘が募り、悪業が高じた為だと思はれる。

五 祝言職としての一面

彼等はさうした法力を示してゐたが、山伏しの為事は、其だけではなかつた。常には、舞ひや踊りや歌をやつた。

彼等は、前にも言つたやうに、山奥に根拠を据ゑてゐた。私は幾度か三河の山奥へ行つたが、参・遠・信の三国に跨り、方五六里

に亘つて、さうした山伏し村が多い。勿論、今は山伏しの影を止めてゐるに過ぎない。私たちが見学に行つたのは、既に「翁の発生」で述べて置いたやうに、其等の村に「花まつり」と称する初春の行事があつたからである。花まつりは、一口にいへば、其年の稲の花がよく咲く様にと祝コトホぎする初春の行事なのだが、其態は舞踊であつて、なか／＼発達してゐる。

何故、こんな山奥に、こんな舞踊が発達したか。其は決して偶然ではなかつたと考へられる。即、戦国の末に、彼等が勢力を貸した豪族の家々が、其後栄えたからである。歴史の表面では、彼等がどれだけの事をしてゐるか、殆ど記されてゐないが、断片的の記録はある。三河には徳川氏と関係ある地方に居つた者が多くゐ

て、徳川氏が栄えて後、擁護を受けたからである。

彼等は、戦争に際しては、其等の家々に勢力を貸したのであつたが、また初春には恒例として、其等の家々、即、檀那の家へ出て来ては、祝福をして行つたのである。ほかひ人としての、昔の記憶を忘れなかつたのである。

由来、日本の戦争には、法力の戦争が栄えた。旗・差し物なども、それから生れたものである。此には長い歴史があるが、其は略する。ともかくも、彼等が戦争に勢力を貸したといふのは、法力で戦争を勝たせるのが主であり、本筋のものだつたのである。

六 にせ山伏しとの結合

ところで、此、初春に里へ出て来る山人といふのは、日本には至るところにあつて、必しも参・遠・信の山奥とは限らない。思はぬ奥山家から、大黒舞・夷舞などが出て来る。彼等は、年に一度、暮れ或は正月になると、どこからともなく出て来て、或特定の村、即、檀那村を祝福して歩いては、またどこへともなく歸つて行く。「隠れ里」の伝説はこれから起つたので、更に「隠れ座頭」などの嘘噺も出来、又、偶然山奥へ迷ひ込んだものゝ中には、此等の芸人村のあることを発見して、山伏以上の法螺を吹いたものもあつたりしたのであつたが、要するに、隠れ里の伝説が、単なる伝説上のものでなかつた事だけは考へられるのである。

此も「翁の発生」で触れて置いたことだが、芸人の団体には、山奥のものと、更にもう一つ、海の岬に根拠を置いて海道を歩いた、くゞつとの二者があつた。併し、近世では、かうした芸人は、山奥のものに限られた。そして、此が本筋の山伏しだつたのであるが、鎌倉以後、戦国時代には、此をまねた、或は彼等の群に投じたにせ山伏しが横行するやうになつたので、此等のものが諸所の豪族の家々を頼つて、海道筋を上り下りし、其等の家々にとり入り、遂には、其にとつて替らうとさへしたのであつた。

七 すり・すつぱ・らつぱ

あまりに有名だから、名を出してもいゝだらう。蜂須賀家の祖先小六は、その有名な一人である。彼が地位を得たのは、豊臣氏が栄えたからである。

彼等は、海道筋を上り下りする中に、一定の檀那（擁護者）を得たものが落ちつき、其を得ないものがうろつく。そして其中には落伍者が出来たので、其単独のものがすりとなり、団体的のものはすつば・らつぱと言はれた。いづれも盗人職だつたのである。

職人とは土地を持たないものを謂うたので、髪結ひを女工業と言ふたなどは、職人の直訳とも見られる。ともかくも、当時さうした盗人職・ごろつき職が厳然として存在してゐたのであつた。尤、現在だつて不思議な団体があつて、而も彼等は厳然として存

在してゐるのである。

すりは、すりといふ道具をもつて歩いた団体だともいひ、旅人の旅具をすり替へることから、さう呼ばれるやうになつたのだとも言ふが、恐らくはほかひ・くゞつなどゝ同じやうに、旅行者の持つて歩いた旅具からついた名だと思はれる。世人は、それを恐れてさう呼んだのであらう。後には、熟練を得て頗る敏捷なものになつたが、当時のは、もつと鈍なものだつたに相違ない。

すりは、早くから単独の職業になつたが、すつばの方は——狂言では田舎人を訛す悪党で、すり・すつばと同じやうに言はれてゐるが——もう少し団体的のもので、親分を持つてゐた。そして更に、一層団体的だつたのが、らつぱである。小六は即らつぱの頭

領だつたのである。当時は、かやうなものが幾つとなく、彷徨歩いてゐた。尚、此外に、がんどう提灯に名残を止めた、強盜などもあつたのである。

八 一二の例

押し借り強盜は武士の慣ひとは、後々までも残つた言葉であるが、当時は、實際にさうしたものが、諸民の部落を荒して廻つたので、山伏しも、陰陽師となつて、諸国に神道の祈りをして歩き、一方には、舞踊や唱歌をもした。其に交つた浪人者があり、其間に発達したらつば・すつばもあり、荒すこと専門のらつば・すつばが

あり、一方、海道筋をうろつくがんどう連がある、と言つた訣であつた。

らつぱの専門は、庸兵となつて、諸国の豪族に腕貸しをする事であつた。そして其処の臣となり、或は、即かず離れずの態度で、其保護をうける。其中に、其主家にとつて替つたなど、言ふのもあつた。

相模の後北条早雲の出身は確かでない。伊勢関氏の分れだと言ふが、同時に、其はらつぱといふ事にならうかと思はれる。探りを入れて見ると、叡山・山王の信仰を伝へて歩いた山伏し、或は唱門師とも見られるので、戦国の頃、段々、東に出て来て、庸兵となつて歩いたらしい。妹が今川氏の妾（或は側室ともいふが）に

なつてゐたので、今川氏に頼り、それから段々、勢力を得た様にも言はれてゐるが、怪しいものである。妹を今川氏に入れるなど、言ふことは、後にも出来ることであり、殊に、彼等が豪族にとり入つたには、男色・女色を以てしたのが、一の手段でもあつただ。

ともかくも、祖先伊勢新九郎の出身は、宇治の山奥、田原であつて、其家は穴太アナホであつたらしくもある。此が伊勢の関まで出てゐたのであらう。彼が最初に連れて出た家来と言ふのは、十人足らずであつたが、いづれも宇治地名を帯びた名を持つてゐる。早雲は、後に追々と勢力を得て、遂に、小田原に根拠を据ゑるやうになつたが、最初は、山伏となり、庸兵となりして歩いたものだ

と思はれる。

更に、古い例としては、小早川氏もさうのやうである。「小」といふ字の付くのは、嫡流に対する小流（妾腹）の意で、小田原在に早川といふ所があるが、土肥実平の分れであつて、山伏し系統の巡遊者となつたものだと思へられる。

これらは古い例であるが、近世には頗多い。併し、あまり名前を挙げて行くことは遠慮しよう。

九 村落制度から生れた親分・子分

かやうに、鎌倉末から戦国時代にかけては、或は山伏しとなり、

或は庸兵となつた様な無頼の徒が、非常に多かつたのであつたが、此等の中、織田・豊臣の時代までにしつかりとした擁護者を得なかつたものは、最早、徳川の平定と共に、頭を上げることが出来なくなつて了うた。彼等は、止むを得ず、無職渡世などゝいつて、いばつて博徒となつた。此が俠客の最初である。

何故、彼等は、さうならなければならなかつたか。此には考ふべきことがあると思はれる。若、彼等が単独であつたら、譬へ徳川の平定があらうとも、博徒にはならずとも済せたかも知れない。もう少しは、何とか身の振り方が着いたであらう。けれども彼等には多くの仲間があつた。彼等は、先、其等の仲間・子分の処置に困つた。

此処で、親分・子分のことを一言述べて置くが、彼等の親分・子分は、農村の制度からとつたのだと思はれる。農村には、親方筋・子方筋といふのが幾軒もある。其外檀那筋など言ふのもあるが、親方・子方となると、其子供は親方の養子分となる。出産があれば、戸籍吏に届け出る様に、親方へまで届ける。此親子の關係が、らつぱ・すつぱにもある。彼等の団体は、此村落の生活が基礎になつてゐた、と見られるのである。

一〇 人入れ稼業の創始

徳川氏の方でも、天下をとつて、納まると同時に、先、困つたの

は、彼等らつば・すつばの連衆の処置であつた。此までは、助力を得たのであつたが、関ヶ原・冬・夏の戦ひで、彼等には手を焼いてゐる。其が多勢の子分を連れてやつてくる。而も、彼等は法力を持つてゐる。ひと先、整理をつけなければならぬ時が来たのであつたが、其処置には、全く困惑したやうであつた。

かうして彼等のうち、織田・豊臣の時代までに、しつかりとした擁護者を得て、落ちつく事が出来なかつた者は、再、落ちつく機会を失つて了うたのであつた。

それでも、村落にしつかりとした基礎を持つてゐたものは、まだよかつた。即、彼等は、そこへ歸つて、郷土となつた。

又、彼等の中には、早く江戸を棄て、宗教の名を借りて、悪事を

働いた高野聖の様なものもある。其後も、永く旅人を困らせたごまの灰は、高野聖の一種であつた。高野でも、此には困つたので、非事吏などゝ、意味もないやうな名をさへ出したほどである。

彼等の中、最、困つたのは、江戸や大阪・堺などに未練を持つた連衆で、何と子分の始末をすべきか、其が大きな問題であつた。

そこで、彼等は、其子分たちを、諸大名の家へ売りつけることを考へた。人入れ稼業は、かうして始つたのである。そして、彼等は所謂侠客となつた。親分・子分の関係は、前に述べた様に、農村の制度からとつたものであるが、今日人口に膾炙してゐる親分・子分は、此人入れ稼業から始つたと見ていい。有名な幡随院長兵衛の頃には、もうそんなことはなく、ほんとうの人入れ稼業に

なつてゐたのであらうが、古くは、其子分を大名の家に売りつけたのであつた。

其を「奴」といつた。奴の名は髪の格好から出たものと思はれる。鬢を薄く、深く剃り込んだ其形が、当時はいから風であつたのだ。そして、其が江戸で流行を極める様になつた。町奴の称が出来たのは、旗本奴が出来たからであつて、もとは、かぶきものと言つた。旗本奴もかぶきもの・かぶき衆などいはれたのであつた。併し、後には、此二者が交錯して、かぶきの中に奴が出る様なこともなつたのであつた。

かぶきと言ふ語が、文献に現れたのは古いが、直接後世と関係したのが見えて来るのは、室町時代からだと思ふ。乱暴する、狼藉する意に用ゐられたのだが、古い用語例らしい。此語の盛んに用ゐられた一つの中心は、桃山時代であつた。当時は、事実此風が、盛んに行はれもしたのであつた。

阿国の念仏踊りを、かぶきと言ふ様になつたのは、彼女には、いろ／＼な演芸種目があつて、其一つに「かぶき踊り」と言ふのがあつたのだと思ふ。

当時の貴族・豪族たちは、何でも、異つたものに目を止めた。阿国も、さうして認められた一人だつたのだ。彼女が京に出て来て、

五条の橋詰め・北野の東などに舞台を構へた時に、此等の大名たちは、直に其に目を止めた。彼女が頭を擡げて来たのは、さうした擁護者を得る事が出来たからだつたのである。

彼等の芸を、何故かぶきと言うたかと言へば、彼等の持つてゐた演芸種目の中に「いざやかぶかん、いざやかぶかん」と言うて踊る踊りがあつて、其から名づけられたものだと思ふ。阿国の演芸では、阿国と名古屋山三との問答があり、それから「いざやかぶかん」になるので、此をかぶき踊りと言うたらしい。

一二 幫間の前駆

かぶき踊りの起原は、名古屋山三が教へたとあるが、山三が阿国に教へたのは、早歌であつたらう。山三は、幸若の舞太夫だつたと思ふ。

当時は、幸若舞の最盛んな時代だつたので、舞ひと言へば幸若舞の事を言ふのであつた。其他、舞々・舞太夫、すべて幸若に關したものを言つたのであつた。幸若舞は、千秋万歳に系統を持つ曲舞から出たので、曲舞のうち、武家に好まれたものが、即、幸若舞であつた。随つて、幸若舞には、武張つたものが多い。併し、もとく、幸若は社寺の芸術だつたのである。

伝説によると、山三は、蒲生氏郷の寵を受けた、當時有名の美少年だつたとあるが、其見出される迄は、建仁寺の西来院に居つた

ともある。当時、有名な美少年としては、彼の外に、もう一人、秀次の愛を受けた、不破伴作があつた。併し、もとく、彼等は、ごろつきだつたのである。山三は、蒲生家から浪人して後、諸国を廻つたとあるが、彼等は、さうして、主君にありついた時には、其酒席に侍つた。男色は彼等が主君にとり入る一つの手段だつたのである。

すつぱと同じやうな意味を含んだ語に、しよろりといふものがあった。やはり、諸国を流浪し、豪族たちの庸兵となつたので、其まゝ臣下となつたものもあつたが、多くは、一時的の臣だつたのである。併し、しよろり・そろりの語から考へて、此は後の幫間の前駆をなしたものと見ることも出来ると思ふ。

日本には、幫間的職分を持つたものは、古くからあつた。王朝時代、貴族に仕へた女房たちの為事と言ふのは、その子弟を教育するのが、主なるものとなつてゐたのだが、其教育は、なかく行き届いたもので、時には、其娘や息子たちの為に、艷書の代筆などをもやつてゐる。此が、後には、男で文筆あるものが替つてやるやうになつた。隠者の文学は、そこから発生した。兼好法師が、師直の為に艷書の代筆をしたといふのは、事実であつたらう。當時では、決して、珍しいことではなかつたのである。

尚、此外に、奴隸から出て、君側に侍つたものがあつた。併し、戦国時代には、すつぱ・しよろりなどが侵入して、いつか、此等のものとの間に、歩み寄つた生活をしてゐた。何故、彼等が、其

等のものとの間に歩み寄つた生活を為し得たかに就ては、考ふべき点があると思ふ。

一三 異風・乱暴の興味

阿国歌舞妓は、念仏踊りの一變化したもので、幸若舞に系統を持つ、謂はゞ、山三の芸の濃いものであつた。そして、此は初代の阿国の時あつたものではなく、二代の阿国が舞ひ出したのだと思ふ。其訣は、前にも言つた様に、かぶき踊りは、阿国と、山三の亡霊との間に問答があり、それから「いざやかぶかん」になる。此事実からも考へられると思ふのである。

かぶかんとは「あばれよう」と言ふ事である。即、舞ひに狼藉振
 りを見せたものらしい。後の芝居では、此が六法ロツパフとなつて残つ
 てゐる。尚、六法は、前に言うたかぶき者の別名ともなり、其一
 分派には、丹前など言ふものも出来た。共に、あばれ者であり、
 伊達な風をして、市中を練つて歩いたのであつた。「六法はむほ
 ふとも訓むべし」など言ふやうになつたのは、恐らく、彼等の、
 さうした行動から出たものであつたらう。

併し、六法は、其以前からもあつた。室町の中期頃に、六法々師
 と言ふものがあつて、祭礼に練つて歩いた。

京の街では、早くから、祇園祭に異風の行列が流行つた。これの
 はつきりして来たのは、室町からであつたが、既に、其以前、平

安朝に於ても、其風はあつたのだ。さうして、これの愈発達して来たものが、風流フリウであり、六法である。彼等は、仮装をして、盛んに暴れ廻つた。当時としては、其がはいからであり、さうして人目を驚かすことに、社会一般の興味があつたのだと思ふ。彼等は、好んで外国渡来の品などを身に著けた。かうした、異風・乱暴は、其がまた、性欲的でもあつたのだ。当時は、異風と荒つぽいことに性欲を感じたのである。

此等の傾向は、其後、歌舞妓芝居の舞台に、長く残つた。大帯なども、其一つと見られるのである。

戦国時代から徳川の初期へかけては、諸大名の中にも、さうした異風を好み、此をまねたものが少くなかつた。織田信長なども、其一人であつた。

当時は、社会一般が、異風といふことに、興味の中心を置いてゐたので、文芸・芸術もまたさうであつたと言へるのである。風流・六法は、さうして出来たものであつた。

風流は、後には、飾りものの名の様になつて了うたが、元来は、異つた扮装をする事を言うたのである。異つた扮装をして、祭礼などに練つて歩いた。此が多少の変化を来して、動作が主になつたものが、六法であり、その分派がかぶきであり、それから

「奴」が出来、徳川中期には「寛濶」など、言ふものも出来たのだが、もとく此等の芸は、風流系統のものである。だから此等の芸は、後々までも、歩く芸——練つて歩く芸、謂はゞ祭礼のくづれ——として残つたのであつた。

芝居の六法は、かう考へて見るとき、あの特別な歩き振りにも、一つの意味が発見されようと思ふ。

一五 幸若の影響

歌舞妓芝居では、元禄以後になつてからでも、平気で舞台を歩く芸があつた。若衆の出て来る芝居などにも、舞台を散歩してゐる

様なものがあつた。奴をつれて「いゝ花ぢやなあ」といつた調子で、舞台を散歩してゐるのである。尤、此には、顔を見せるといふ事があつた。此も見逃せない事の一つであるが、歌舞妓を散歩芸として眺めるのには、尚、他にも考ふべき事があるので、譬へば、道行きには「舞ひ」の手ぶりがある。即、幸若が割り込んで来たからである。

元来、幸若の舞ひぶりなるものは、地固めの舞ひ（即、反ヘン閑バイ）から生れたもので、足ぶみをして舞ふものなのである。歌舞妓は、これから変化したものであつて見れば、愈、散歩芸・足の芸とならざるを得なかつたわけである。かういふわけで、散歩芸にも其起りがある。風流・六法・丹前・奴・寛潤——此等はいづれも皆

歩く芸であつたのである。

歌舞妓芝居はそれから生れたのだが、尚、此には、狼藉の所作振りと、人目を驚かす異風とがとり入れられた。勿論、此にも、理由はあるので、前にも言つた様に、かぶくとはあばれる事であつた。かぶき者・かぶき衆とは、異風をしてあばれ廻つた連衆のことである。後には、あぶれ者など言ふ語をさへ生む様になつた程で、もとく彼等はごろつきだつたのである。山三が、津山で切り死にをしたといふのも、彼があばれ者だつたからである。団十郎が、舞台上殺されたのにも、さうした関係があつたのだと思ふ。荒事など、言ふものが演じられたのも、決して偶然の発生ではなかつたに相違ない。此乱暴狼藉は人形にまで影響した。即、金平

ものゝ発生が其である。

一六 遊女を太夫と言うた訣

かやうに当時は、乱暴・異風が、社会の興味の中心となつてゐた。それから歌舞妓のやうな芸術も生れた訣だが、此風潮は啻に、男の世界ばかりに見られたのではない。女の方にも、やはり、それがあつた。吉原其他の色街に於て見られたのである。

元来、吉原・島原の遊女を、何故太夫と言うたかと言へば、彼等は元は、幸若の女舞太夫だつたからだと思ふ。そして当時は、此女舞太夫が非常に流行を極めた。其訣は、男は一般に見識を持つ

て、あまり舞はなかつたが、女の方は激しく此舞ひを舞うて、それが世間に受けたのだと思ふ。

彼等は、それ／＼座を持つてゐたので、最初は、市内の彼方・此方で演じてゐたのだが、遂に吉原に押し込められるやうになつた。

それでも彼等は、時を定めて、此を演じた。其が受けたので、追々これをまねるものが出来、彼等も亦、太夫を称へる様になり、遂に、此が遊女の称とさへなつたのである。

併し、彼等が最初、座を持つてゐた時には、村々によつて、其が違つた。随つて、彼等は、其等の村々の方言を持つてゐた。ざます・ありんすは、即、其形見と考へられるのである。而も、此言

葉は、新吉原になつて後も、長く廓言葉^{サト}として、保存されることになつたのであつた。

一七 八文字は女六法

それはとにかく、彼等が男のかぶき・六法の、直接の影響を受けたと見られるものは、道中に見せた八文字である。八文字は明らかに女の六法であつた。

此が嵩じては、かの一中に謡はれた、勝山に迄なるので、一中節では、彼女が道中の途次、湯巻を落したが、其まゝ道中を続けたと言つて、大いに此を讃美してゐる。我々から考へれば、どこに

其ほど讚美する価値があるのか、と思ふのであるが、要するに、当時としては、其が女六法になつてゐた。そして其が、性欲的でもあつたのだ。

いき・はりなど言うても、もはや今日では、訣らぬものになつて了うたやうだが、所詮、女性と男性との意志の一緒になつたものである。

かうした気風は、吉原だけに見られたのではない。京の島原・大阪の新町、此等の廓にもあつたのだ。^{サト}此様にかゝる方面にまで、ごろつき・あばれものの影響があつたのである。

以上述べて来た様に、歌舞妓芝居の起るまでには、從來考へられてゐたものゝ外に、かうしたあぶれ者・乱暴者の生活から発生してゐると言ふ事實があり、尚、直接の原因としては、幸若の舞太夫の扶持を離れたものが、民間に下つたと言ふことがある。

そして、此二者が相寄つて、美的な乱暴を創始した。美的とは言つても、其は美学的見地からのものではない。尤、中には「助六」の様な美しくて、力のあるものもある。殊に、当時の、さうした風潮を念頭に置いて此を見るならば、団十郎の此を作つた氣持ちは、容易に訣ると思ふのである。

かやうに、かぶき・かぶくと言ふ語の、元の意味は、乱暴する・

狼藉するといふことであつたので、歌舞妓芝居はそれから生れたのであるが、もはや今日の歌舞妓には、さうした元の意味は、殆ど無くなつて了うてゐる。併し、今日でも、全然それが無くなつてしまつたとは、言はれない。

譬へば、日本の芝居には、濡れ場・殺し場など言ふ、残虐な或は性欲的な場面が少くない。学者の中には、此は日本の国民性に合はない、不思議な挿入物だ、と言ふ様に見てゐる人もある。坪内・藤岡両博士の御意見も、さうの様であつたと記憶するが、此なども、以上述べたやうな、これの発生・源流に就て考へて見るならば、一応の解釈はつくと思はれる。

勿論、さうしたことは、時代的好尚、其他の事情によつて、特に、

病的に発達して行くこともある。

しかし、歌舞妓芝居にあつては、既に、其起りが、乱暴・異風——そして、それが性欲的であつた——を採り入れた芸術なのであるから、さうしたこと——残虐的、或は、性欲的な場面——が、多分にあつたとしても、其は、必しも、不思議とするには当らないのである。

一九 「士道」と「武士道」と

大体、今日一般が考へてゐる道德なるものは、歴史的に見て、此がどれだけの価値を持つてゐるか、一考を要すべき点があらうと

思ふ。

今日、一般が考へてゐるところの、所謂武士道なるものは、大体、徳川氏の世になつて概念化されたものである。徳川氏は、天下を取ると同時に、先、儒教によつて一般を陶冶しようとした。即、謀叛・反抗をしてはならぬといふ、道徳的陶冶をなすべく、最初は、此を禅僧に謀つたのであつた。山鹿素行などの一流の士道なるものは、其後に出来たのである。

武士道は、此を歴史的に眺めるのには、二つに分けて考へねばならぬ。素行以後のものは、士道であつて、其以前のものは、前にも言つた野ぶし・山ぶしに系統を持つ、ごろつき道徳である。即、変幻極まりなきもの、不安にして、美しく、きらびやかなるもの

を愛するのが、彼等の道徳であつたのである。だから、彼等の道徳には、今日の道徳感を以て考へては、訣らないやうなものもある。

二〇 氣分本位の生活

一例を挙げるなら、北条早雲が三浦荒次郎を攻めたとき、三浦の城が落ちると聞くと、早雲の家来十幾人は、三浦方の方を向いて、割腹した。此は嘗て、三浦方に捕はれたとき、彼方で好遇を受けた其恩に感じたのだと言ふ。今日、それだけの雅量あるものが、果してあらうか。

後世の俠客・ごろつきの中には、多少それに似た道德感が流れてゐた。睨まれ、ば、睨み返すのが、彼等の生活であつた。即、気分本位で、意気に感ずれば、容易に、味方にもなつたが、また直に、敵ともなつた。我々が、多少でも、かうした気分を味ひ得たのは、釈場に於てゝあつたが、それも、今日では極めて淡いものになつてしまつた。時代々々の道德の力は、あらゆるものを変化せしめずには置かない。同時に、時代々々の文芸・芸術は、此と交渉なしには生れない。現代の道德は立派であると言へよう。だが、今日では、多少、それが固定したと思はれる。随つて、感激性を失つた。

現代の文芸・芸術が、此を重視しなくなつたのには、さうした理

由があるのだと思はれる。

二一 結び

話が、かなり岐路に分れたと思ふが、要するに、日本のごろつきには古い歴史がある。而して、鎌倉以後は、此が山伏しと結びつくやうになつて、著しく社会の表面に顔を出す様になつた。法術を利用して、大名にとり入るやうになつたからである。

併し、彼等が根拠地としたのは山奥で、常には、舞ひや踊りを職業とし、年の始めには、檀那の家々を祝福して廻りもしたので、其中には、山奥に残るものもあり、里に出て来たものもあり、里

に出て来たものゝ中には、大名となり、また其臣下となつたやうなものもあつたが、遂に、其機を逸したものは、徳川の初期に於て人入れ稼業を創始して、大名・旗本に対しても、横柄を振舞つた。

歌舞妓芝居は、彼等の間に生れた芸術で、それには幸若舞が与つて、大きな力を致してゐる。

歌舞妓芝居は、其後非常な発達をして、もはや、昔の倅は止めぬほどになつてしまふたが、それでも尚、此等の、発生当初のものとの関係は、全然、別れ切りにはならなかつた。其間に纏綿たるものゝあつた事は考へなければならぬ。

尚、無頼の徒の芸術には、文学方面にも、言及すべきものがある。

日本の文学は、王朝時代に於ける女房の文学に始まり、次で隠者の文学が起り、此にごろつきの文学が提携し、此等のものゝ洗礼を受けて生れたのが、即、江戸時代の町人文学である。此等の点については、いづれ細論する日もあらう。茲には無頼の徒の芸術として、歌舞妓芝居の発生を述べた。大体、其特色は尽した積りである。

青空文庫情報

底本：「折口信夫全集 3」中央公論社

1995（平成7）年4月10日初版発行

初出：「民俗芸術 第一巻第八・九号」

1928（昭和3）年8、9月

※「昭和三年春、神奈川県図書館協会主催文芸講演会講演筆記」の記載が底本題名下にあり。

※底本の題名の下に書かれている「昭和三年春、神奈川県図書館協会主催文芸講演会講演筆記。昭和三年八・九月「民俗芸術」第一巻第八・九号」はファイル末の「初出」欄、注記欄に移しまし

た。

入力：高柳典子

校正：多羅尾伴内

2007年7月13日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

ごろっきの話

折口信夫

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>